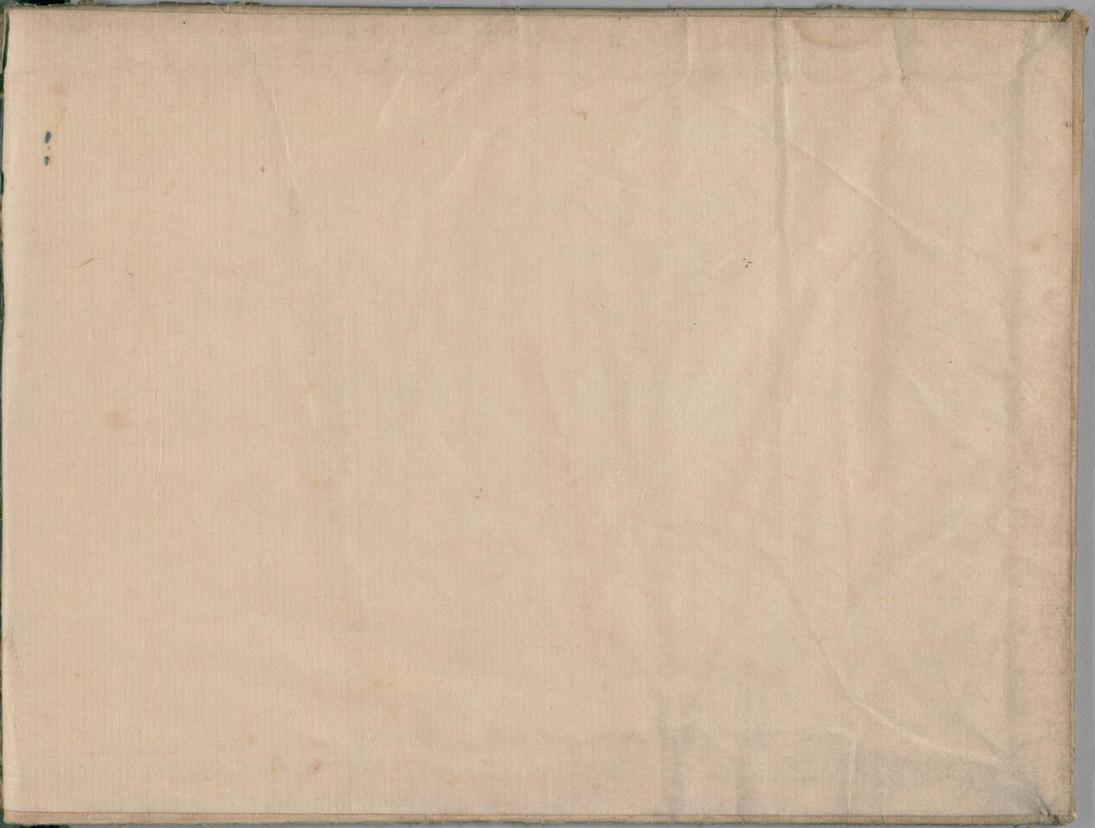
国立国会図書館　タイトル『傾城情の手枕 5巻』 請求記号 京-259

ガラス使用

禁徒氣
續の巻

傾城情の手枕

東京圖書館
門 類 函 架 號 冊
京 一〇 二九九 五
特別 京 5 259



国立国会図書館　タイトル『傾城情の手枕 5巻』 請求記号 京-259
ガラス使用

No 21825/22

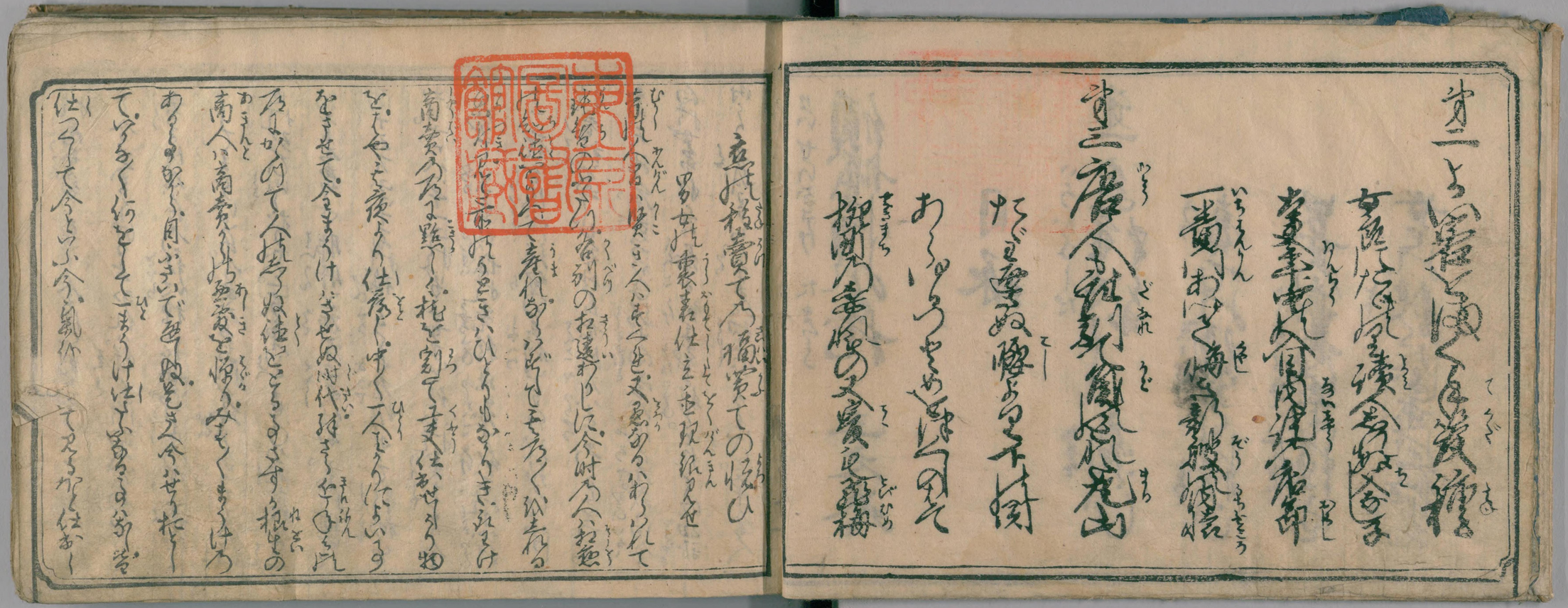
傾城情の手枕　三之巻

目録

東京図書館

国立国会図書館　タイトル『傾城情の手枕 5巻』 請求記号 京-259

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『傾城情の手枕 5巻』 請求記号 京-259

ガラス使用

かこひ殿の中を二人で拾ひあるでかへてくらぬ。其
後へ西川町ぢうさ。貴なる役者は親方の名程
殊賞を取りて。おまこれにて此年屋子と札の
付てある。目の中はまくしいまハ公男十年何程と
きけハ百姓と申して大あれ川かわりて。平体ハ拾ひ
と申ひどに。女子ハ屋ながらよりさらにて大あで
かりあしかもなりさふか程を以体して下されなる
まうせかして抱てゝあると。今まとあせハ是が大夫
かむまれつきで。田舎口へもむくものでござると。
赤坂は童をつまでおれハ今かに鼻麁はをかく
程がかりござると奥の方を見へてあり宮市して
ゐる。今まゐる子ろうそこと申せハ。おまハさゆかうら
よくござるが。まであるをつもむる時ハ。床はけがれ
がつかなふござれハ。愛ハこなることお對しやが。床は

坊かわかぬと合点して抱てござりて。万一坊がお
けハこなくれお仕合。床がよりつまるむまれつき
と。見極めておくこ子なるハ中くに女あるなどで。
手放て程でハござらねど。そこは不が不要ごと
見へまほ少へ。大あは負てしんせると申せバ。
それハ運次第さぞめなりき雲紙目當に第さ
賞金人かわるものと。さい切て此すぐり程を取で
仕切つまでくりて。まをたゝるまを念ゆるり

女帰にたくはり讀人知ぬ父母子
撰によりて出給ひ乃老程

昔うし背中に後ハ久ぬといひしハ女を好れ網と
おもへ。我をても此いひ人は中るにハなる氣なり。
すいかんよいの花乃鹿身よりハ女中は鶴鹿この
ふし。今時の人なる皆此物好と見へて。女を難くひ

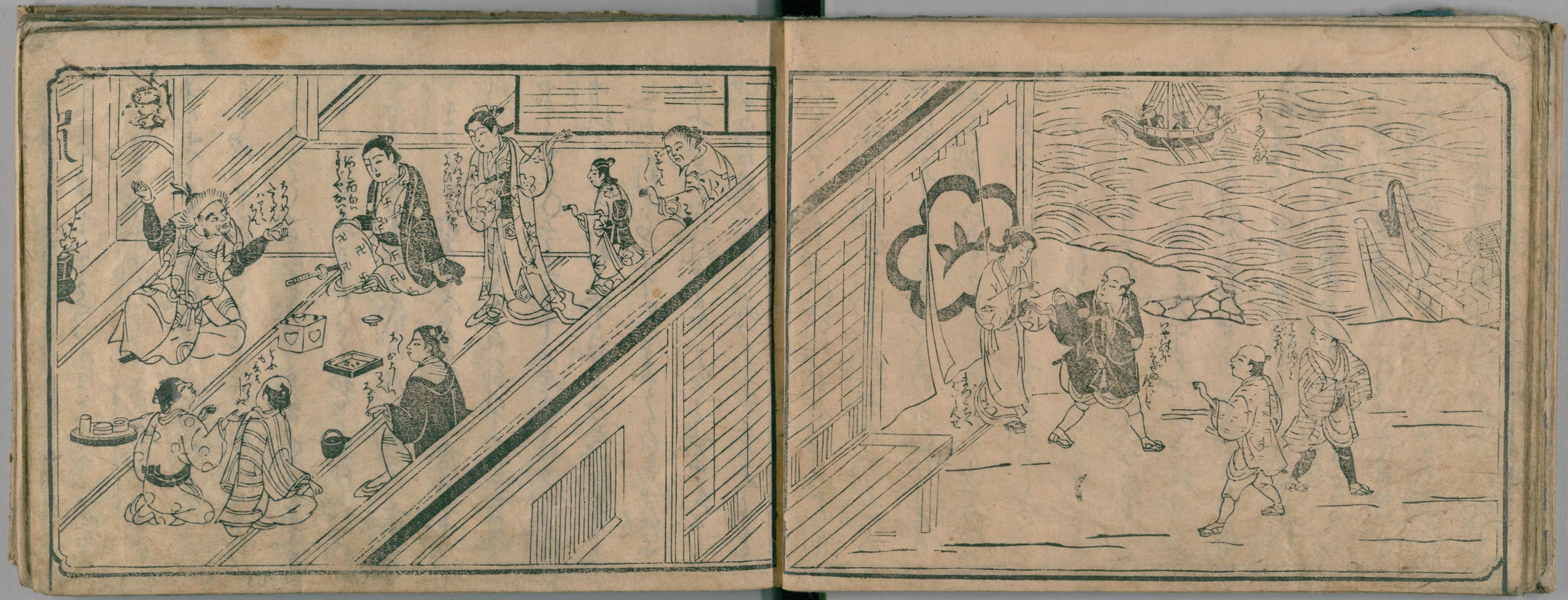
国立国会図書館　タイトル『傾城情の手枕 5巻』 請求記号 京-259
ガラス使用

こうて。読み浦く。鳴ぐさをとらしも人れ入れ
所にふることいふ字れ無いにはいかく。むまれ出るとともや
おうし詠えし自然と。梁見よく。往古より八男女
たがいかなる因今そだちも風俗各別にあらぬ。
風もつうきさなかめし。横が枝を焼本になせる
山へも。蘇れ鏡となる面あれは鬢梢をひさし。汲
波海士も眼見袋もうて。浦の笛やに花をや
ます。みづ袋て聲あしかなど。見るを見ます。
指やたごれ樽をうけて。おつまかげの小便りひ
と。伽羅の池は江戸にゆひ。麻髪浩は物ずき
れあるまつき。見もお趣れ可愛がりてうわりて。
情の二ツ文字。今ひく牛乃角文字れ。立といふ程
をまきそめ。程に出て。鄉鄰をかぶる辛苦をす
まれて。男つくる事よと。くつ目れ打やぢが理屈

見せうら。禿程をもしめてうつき夏に。此小便れ
が湯めを見て。聖も山も立れ淳世と。秋高黄れん
じ。ゆれ時吉を恒ひ忘るをかくして無りけるを。
彼程夫。禿程をうれて。よいこ程がぐ。愛れ時る
れもふるより。八実入がすくなからふといひて。
なかにとり知ていたしか。八まんはまをまへて。今に
あがの。れ秋入を見て下とさ比。忘れ程をたのを
に。廓へ流れて。ゆり禿に仕立る。世ぐ。かれのも業
ふるさらより見なくひまざとおしへるとまかし。
第一ハ。女郎れ。ちめいなるにつけおけハ。そのつ
うら。左配を。ゆつさ。あの氣をとるまをかし
かどまかばずして。ゆるとうくひまれ。を三光
小流くると。れかしとゆ。れ夏のまこし。続く
てかいかの。をとひくこうかされしに続て

河ぶくれ。なりても。更におとろくる
ものうることたのそ。申て。今宵の更
ふる。
雨とふりて。ふるとそ。ぬれもいと
ふ。へとうりて。きつねのかりて。ゆくこんの
いそぐ。ハ。ひとつもあくたくなれハ。
うつくつうつ。ふるめてもくそうそ
ひとそれ。ふ。さへ。ふるせ。ハ。女郎
これにもうおとろかれんとやさん
みてをくれとも。ハ。ふるもありしひ
の世いまさまて。雪ぶりを。乱のいぬまを
てくれとうりまくかんとやまぬつあめ

れバとこんの男に。中てあるくとのうれふ
かぐのやらふもひくとてまうをそれぐらのなもせうけあれびくの男
うれ。ハ。ふるをくりて。武士所へおうまうこれる。
肉食をしてうみて。ふるまくるふの。
小判拾めとくへバそのあるふ。ハ。ふるをくれ
とそれもふとそ。ふれちぐひてそ。ふるふ
さこのあにひひなそ。ふるとそ。ふれ女
ハくぐのごれとそうとぐうそうふくらのつ
ありそれとそのおりて。ふるかくれ
代おうてそ。ふれおうくそうそ
ハさまのさんうそ。ふれ。ふるくそうそ
ハさまのさんうそ。ふれ。ふるくそうそ
ハさまのさんうそ。ふれ。ふる



国立国会図書館　タイトル『傾城情の手枕 5巻』 請求記号 京-259

ガラス使用

七ハ十人もあるせけれとて。いまし御まさるまんじやれ西を
りし。よりてより庭物ハ御ありし。高人様者ハ御
まり。ホハとりめし御中様の御まり。本御れ庭人まゐ
さて御りけるに。変く実に御まわるあしや。日本の
いふのをかく御まへ也。いふのハ御西と見えて。お
かくハ使ふてあつきまてくさしあとこゝ見ける。故れ
世紀がしこそ革命れ代が此庭人をあづり 吉野の
いふ方をきくに。庭物も人ハ今にて。たゞハ御ゆゑ
れ御思やうをと住て見まれば。神れより二三角ゆゑ
あざらせを。○ちくてよやも命れ御りくる房
中れとりを御れ。是ハ秘してつゝ御網合せし
を一包に判ちあづかして。ひきふうりぬ也。ハ御侍に
宮ふ人多く。迷れすまかくまみでゝ。女郎大をよ
びて此ゆゑ人をけて。そのつまきを見るへしと。

かんくもなりぞあ也。ハ分れこ也。今ハ到人者也を。
かへまの○きしを中に故侍といふ。ハ彼庭れかんが
と御り。此女郎を見てゝぞ此れ庭人行をつゝ也
しうゆをなんぞ。やこ御もけく見てゝ。こゝ御ハ
秘れ此孫六年ゆゑでハ御いかゞ庭へハ丹波へ御れ
さぞとゝ。丸つきて御ゆゑ也ば。庭人ハ御ゆくまゐて
也んくといふてゝぞりゆるこそありしなれ。庭人へ
此神を見て。是より脱くせんぎして見るに。孫を
かんざうせられて。行方御く此ゆゑ也て。似せ庭人を
御り。様侍にあらせ也ともあれ也て。婦之御日本人
に一服づゝさせて。人れ志ゆゑをまりけしが。婦ま
あふて此ばけかわしを也。古にあれハとて籠おれ
ゆ○がさ也といふ。ふ御ゆゑ。御ゆゑとゆゑてそ也ハ
くしゆゑやうなりゝ身をしらいりしれかんハ口んと

国立国会図書館　タイトル『傾城情の手枕 5巻』 請求記号 京-259
ガラス使用

京
5
259

傾城情の手枕巻之三

国立国会図書館　タイトル『傾城情の手枕 5巻』 請求記号 京-259

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『傾城情の手枕 5巻』 請求記号 京-259

ガラス使用

No 21826

傾城情の手枕　四之巻

第一　古夏子凡夫の艱難

[illegible]

一年斗楽[illegible]

[illegible]

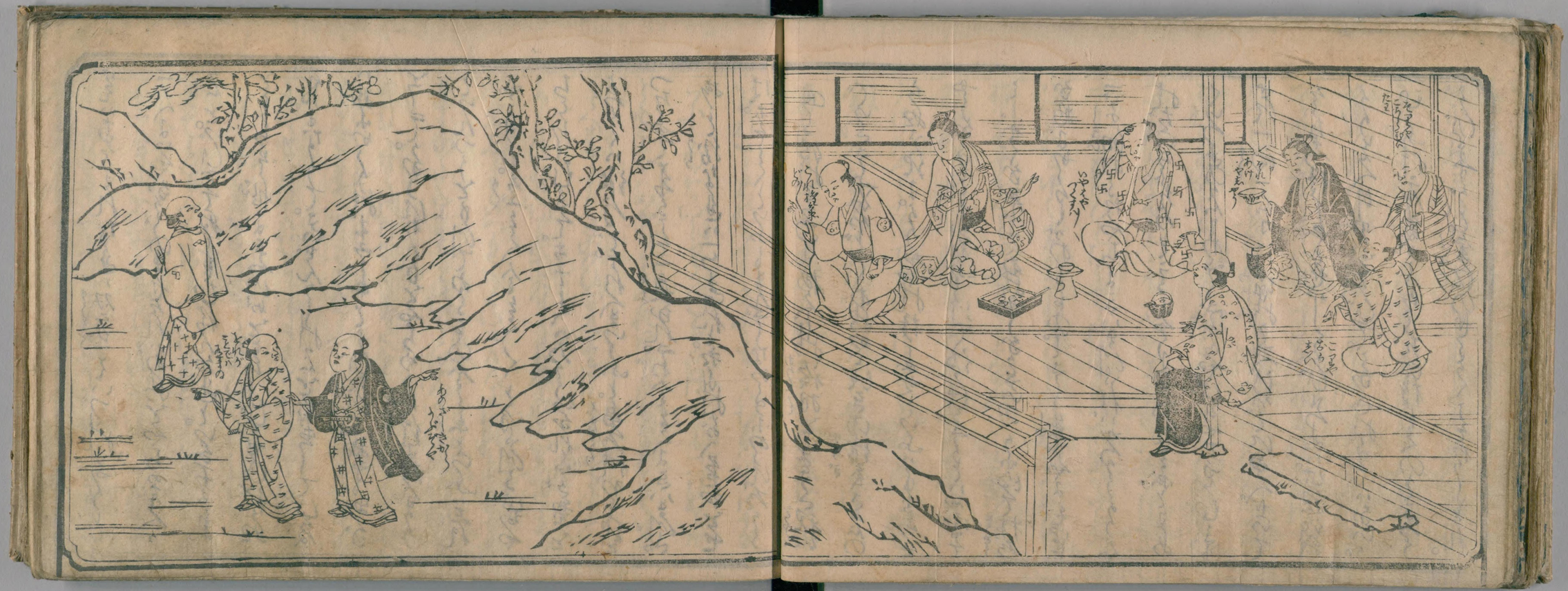
無之[illegible]が[illegible]

[illegible]年[illegible]月

米屋松之助

国立国会図書館　タイトル『傾城情の手枕 5巻』 請求記号 京-259

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『傾城情の手枕 5巻』 請求記号 京-259

ガラス使用

なのいとしのハヤレわすれハ月花ぐさやち今をさくらのやかふきてあそびし事をさそうけ。ゑりあやめてそこいぜんうしおりをかさねてくらしひとりぬやうにいもんせんとてあまたのものへ。皆なのともわふてハ自あんどうけってのまぢ。まよいにおもとてこぶそれぢうまでかいてそれと。月をちぐはてれをまたれまいそとものくわをはぐしえんどをあけ世かやうくとたゞれそのぎしりてれぢくわちりをさだんのうにかまぜて。後世へ出れハまだれもとれもち重につの角やぐらて南きものおつぎくうりを宝とてびっけ。そのてなのうれハ世てあやまりさとうにこころくとをちぐんをくとく後をたてくれ通いうちんたゞれちをやごとうのみのいぢをしず

コレわやちいぢうさいうのやうかいもちのさもでハなの。ものさやと明かりをあけてやうにしてうそう河のあまのうちにくわくれる前。せうなくとうのやんぢをちぐりかでま一夜へいぐたさやもかうとをうあれうきひ。とうやこぶをきうふおぢんくぢのうふてかうまひ中をとうもとれハうそれハ花をそうべ。なのうしやおぢまのやねぢうまて私うぢそうかうあくめんいれとなれやうひとうのそこてそんしくとまひハれとさう一そのぜハ人のくんをうらふてうるやかうさうひとの経丸そのなりうよれのありてあやうと華いうものぐかうそをもりぢをいうとくをやぢうをくへ

せはたゞ、酒とをすゝめさせたまひてどこをと
なく帰りおはしましぬるをかしはのかりうやと
又たゞにぞふらせたまふめるさ、やかにまゐりて
もんいれおはやらんとふおとをきゝてそれ
うり宮もきゝつけさせたまひてはゝきみ御
前まてもおそれとゝいみしきをとり
あへてさわぎもせさせたまひてさし出て
そのかうらうちなくひ申さへをきゝ
ろぎしんきやくの御前にそれ出たまへる
ほとの御ありさまいとめてたしさるは
あやまちもし給はぬ御本てうに。
おもてぐのみあそばすをかうはいちしるく
御心ばせのほどもみえたまふ。
ゝいとおかしうおはしますをいとゞ
いかにせんとおもひまとはせたまふ。
いつふやけさふで御ぶねしたのたゝ大浦湯
とうの女さん人ばかりにて。人通りもまれなる時分
はしぶねをこぎよせてとまりぬ。

ゝまいりたまへる御ありさまいとめてたし。
ふるまひの御ありさまいとめてたし。

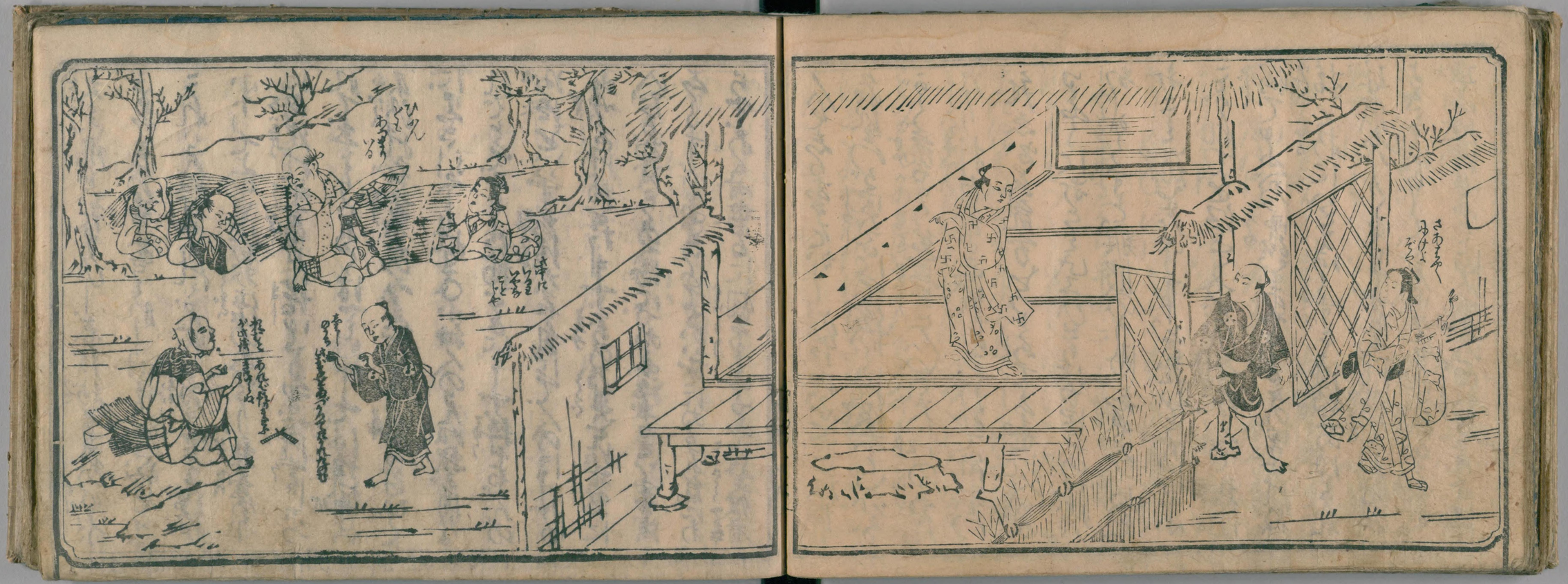
比よりこれは東子さが世どうきものは云ふ
いふてさへ自由のはなりこしまして夜はふけ落
ちろきは東座の戸をひきふたらせて。松也
じやとゝへどこゝへ泊。くちなしはれ物をやらぬ
身なれば。あけぬもとりさそれよりやうく検
しぞ。ゐの花山水をゆう方へとゝけまたづ称し
まちうき比文得より帰るのよし。宿は居るを
さいつひは寵はまへを無りて。小座敷にいれば。
六兵は所四兵は兵を数てのこりは落居りて
くろ[illegible]は香はなの桶。布織居里をかさづ
け。碓もあいらに猿張は山椒大夫のよりな。
さるけどにあつまなり。西ちよりは新をう
けぐらの所は新まて。氣つまりなら是非
もなく。係し行焼はびくりも今すぐに物なる

しく。なくさむんはなくて内はは神をのぞくに。
さきは丸出に重をもへ。龍奥はむまり者を
こしらへてはおきしが。是へ出ぬは河賀て見る
を待と見へしが。夜更て河原も。夏見て雲
まとんおりしく。たくこなどのまてゐ也は寄
こまりを姫かさす。雨か下ぞくらうて小判拾ふ
源性をそれはそうに鼻は乳呑子を抱き髪
をなでくとし。神下ぞうさま涵のうちに
きうゆ也は東とありより全入の女帯をもてき
て借よし。住をひさしぶりで。是は東内同にかく
ゆまをといふ。あそびは郭まなりて内徒ゆ涵に
なりしく。いつかは子がなぶさいかひ。まはめるべさと
おりへど。世は中にいれ。是は出世と。ごけ家の氣
は入る代とは立身なやし。ふたる夜はなじめつ

国立国会図書館　タイトル『傾城情の手枕 5巻』 請求記号 京-259
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『傾城情の手枕 5巻』 請求記号 京-259

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『傾城情の手枕 5巻』 請求記号 京-259

ガラス使用

朝門あらいおぢ。君ハ加賀にもかほ程れ。梅子ゆへに
ちぬしゑまほしく。梅子乃陳子を呼てこれだけ云
いやさ紙子姿人の目に感義一きひ見ゆへ。
見おとろふ者。濡らい米もいい破れしあ宣とおぼて。
常の雪ぶり風雪をあがめやすをしゆぬ名の命
にかへても。なりや御堂ゆへ中あれば。意義内ゆ
ぶりをかけゆよりや御まいらせんといへば男洞
こぼしんに洞しうぞんずれどもあさましやしきさ。
鉾小かつて動をいたす私がもらひまくから洞ぎ
たのなし。逆乃は芳志に出世いやしてから申請ぜ。
それでお願けゆ。世海ゆんとすゆをこれ人の
乃命らへと宵も志れす場で。まづかれ雪ゆ
りの法出世の来も志れぬ小。願ゆありてむなく
ありしが。私成に思ひこなふ志んぜふ。さ中た絹のおに

なりますすれば。おまへすこすにおとゆすとすも
秘義せし。雪を結れ戸開いて放しあれば。雪ハ
悦び梅子に習ゆ。遊びゆけもお祖母志がい
はなしてやりますから。ぶんぶんぜ門おとゑ事な
る結能は男かんしてむかるしも情につきとみ。
ゆ礼の中ゆゑもあるものを氣をもだく給て。
おいもの残ちじめつきぐの老人先ハ夫人のお
むまゆも人事通た海なされかい。雪乃かなりに一角
れくづゑなさ海こと今は紙子姿にハ羽がなくて。
事でこぶるまゆ空皆く雪ををしめだ。れろ
かゆる海らがいぶん。あの雪ハ夫れ為なる
る。大臣氣ハいふにたよりすと之卿なりじめれ
きくの役者。志よりくありしかども寒
人小ハやらで信しかゝぞ。神とも夫をてとひ

国立国会図書館　タイトル『傾城情の手枕 5巻』 請求記号 京-259
ガラス使用

かゝあられしきたく人のなれる果とハなりかれす
なれ情と其一に此つとめとするものなれハなる人の
思ひとかゝるへるハまことの情にあらぬなるゝ人の
ちらさとかゝるへくすこそハ実の情をいふべけれと武士
の織母まはる心底を知ゝ此そ我を相望ぬを
中に添の事かゝ上総より此遠野の都へ着
食焼とかゝへおきしが樂焼の茶さんを思あへに
志ゝるやうな顔おしろくやけるハ此所の母なるゝ我の
ちとかゝへてやるが情でこゝりまたなら我にも一度
の情残りけて下さるまゝ是よりいかがゝ此所の
にかれまして鶴の御かりますは此ハ上ゝ是ゝ
はしてせめてもそれとあげましてたのしきに
しくわりまれにいつともぐろつけたやうに
れぬにとすばめて情の所結と結むすこそ一ツ

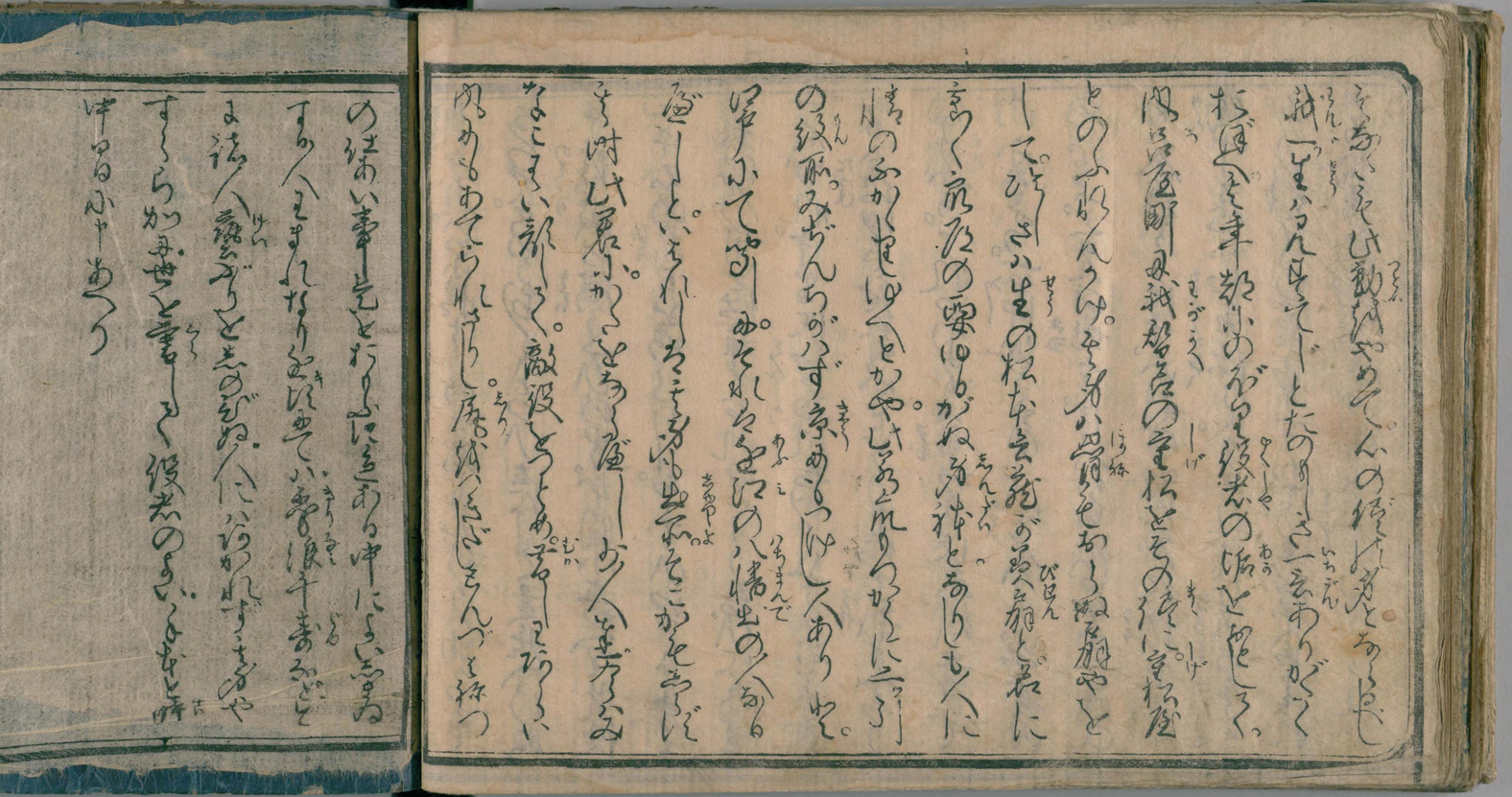
真なれいかに情とりの云義も是ハかりハ胸かゝるゝ
なつてそのうちくとつひ立にしく立居へ行ぬ
千度波の縁えひの男本國小立かへ是先地
二千石の売りをゝらハし。そこひ江戸に帰る
表向乃用と仕舞てそれかゝより悪びに義堂
一人つれ中皆に是ゝ物はしかゝくともこそ云義
方へ得ゆき度義にとりて何と我を大志り
たまふのそれいつよりハ重かりしに表紙立衣で
門にまもり一節残るひし常人なりいで其所
の雪ハ三光の鶴望日にハ白銀星にハ二流の
日ハ金ゝりはす小刻の山城産に積の世縮
緬十巻に紅玉源ゝ下されれハ旅の立
ぶり数くの重事すんでのち縁大臣に出れ
けるハ雪も籠とまなれく自由乃身となれた

国立国会図書館　タイトル『傾城情の手枕 5巻』 請求記号 京-259
ガラス使用

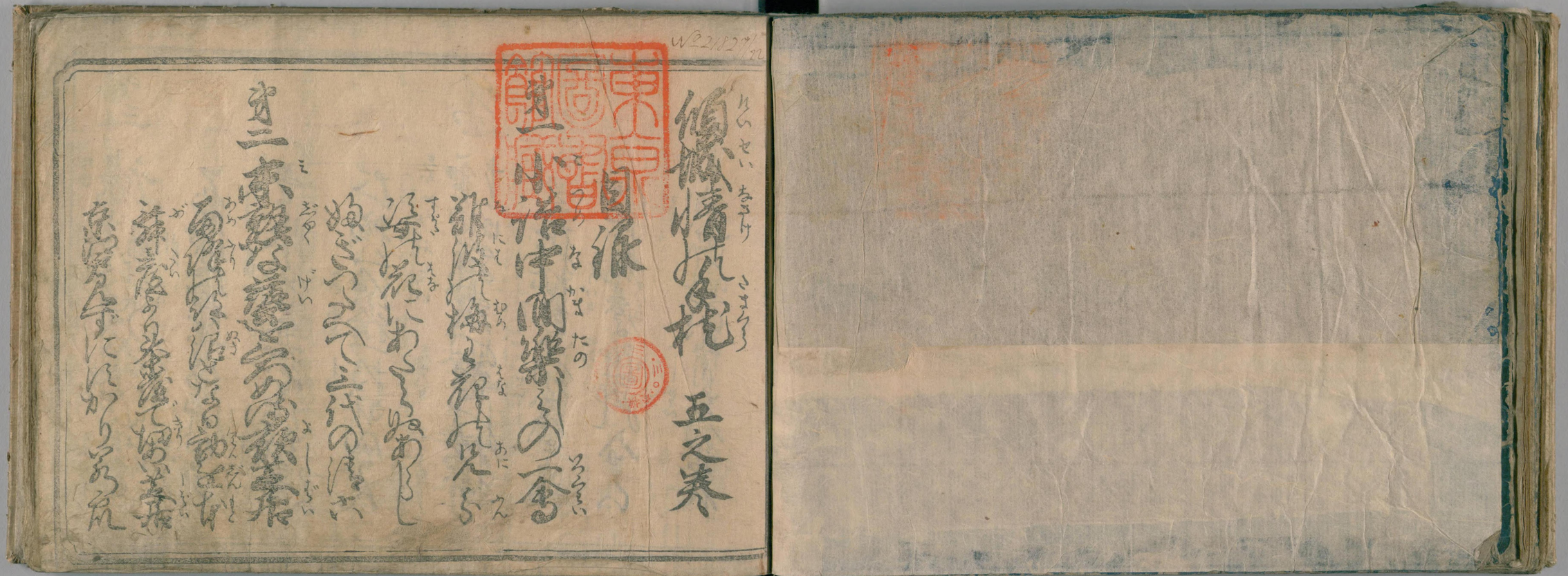
京 特別 5 259

傾城情の手枕巻之四 終

そなたこそ此動機やめてんの縁は身となるは
我一生はるんはてじとたのりしさ一云ありがて
お遊ぶ年期小のがり役者の垢を絶しく
内呂屋町母我智名の室松をその縁に室松屋
とのふれんうゆ。其身は胃もおらぬ扇やを
してひさは生の松本云義が黄扇と君に
言く前段の要ゆるがね身体となりしも人に
情のふかく生ゆへとかやしかるれりつかに二引
の紋取。みぢんちがはず京あるつゆし人ありゆ。
帰ふて寄しゆそれは室江の八情出の人なる
屋しといたれしたこそ身も出来そこかをしらぬ
其時此君ふかるをなる屋しお人を考ふみ
なこまい新しく。敵役をつとめ。若しまたらい
内みもあてられさりし。庭城へ遠ざしたんべを称つ
の縁あい事見をおりふ江之ある中にふいしまぬ
する人をまれなり金城ゆてハ雪浪千寿ぶどと
ま詰人蘇ぶりを志のびぬ人にハ行かれずこそ身や
すらかぶ世を書しまく役者のよいくまを時
中日ふ中あつり



国立国会図書館　タイトル『傾城情の手枕 5巻』 請求記号 京-259
ガラス使用

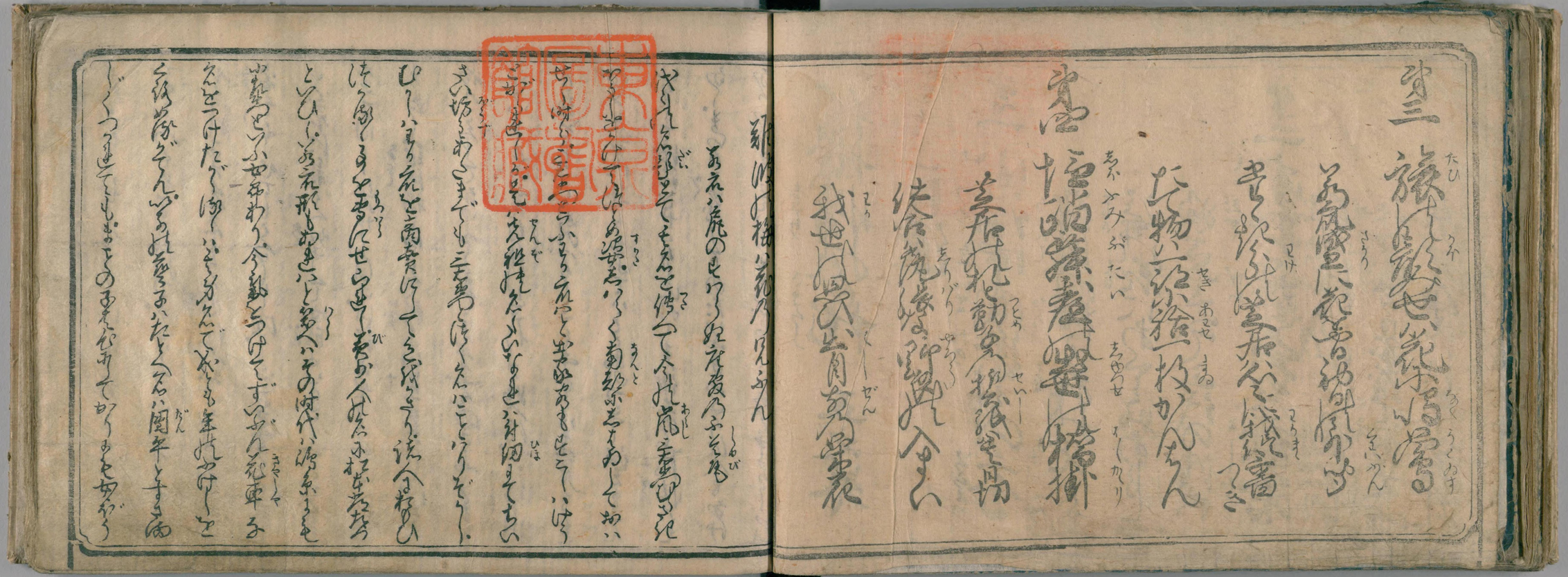


傾城情の手枕　五之巻

第一

国立国会図書館　タイトル『傾城情の手枕 5巻』 請求記号 京-259

ガラス使用



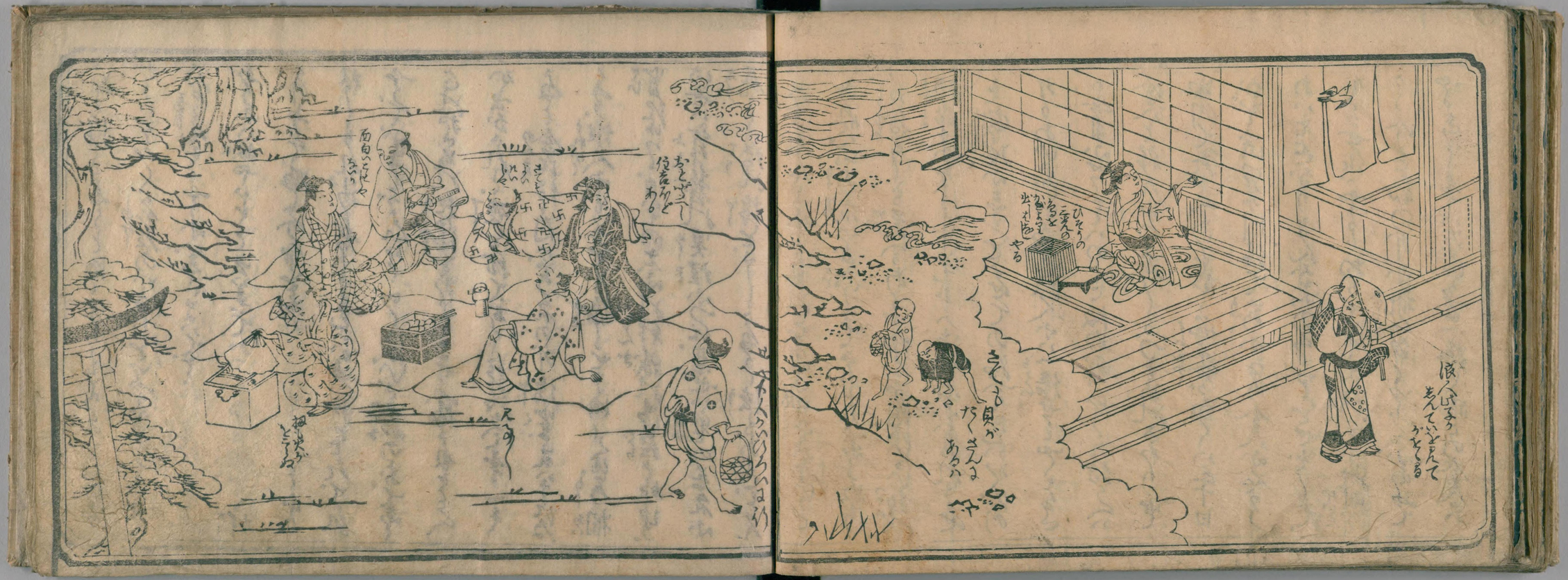
国立国会図書館　タイトル『傾城情の手枕 5巻』 請求記号 京-259　ガラス使用

我知つらそうにおげんの仕事をつけるを見てゐる
人々は口々にこの仕事を
ああいやだ〳〵
こんなやつはおくさんをみてもらつてゐるがいゝ
などゝ悪口を言ひながらそれ〴〵に
出て行つてしまつたので
おげんは一人になつて
仕事にかゝつてゐるとまた
新しい客が入つて来た
おげんは
いらつしやいまし
と言つて
客の前に
ぺこ〳〵
頭を下げた
客は
酒を一合
と言つて
腰掛けに
かけた
おげんは
酒を一合
と言つて
奥へ
入つて
行つた
おげんは
酒を一合
と言つて
奥へ
入つて
行つた

おげんは
酒を一合
と言つて
奥へ
入つて
行つた
おげんは
酒を一合
と言つて
奥へ
入つて
行つた
おげんは
酒を一合
と言つて
奥へ
入つて
行つた

りましたいと申せば是ハおとしあい一ぐさみがで
さてさまづ何かあしにその梅之助よひませと人をつ
かはしさつそくよひよせたほ五持まて今ハかゆて
そなくこにたしんなまさバ我等仲人して今よびあいそ
ふさぬにまづまたんぜこゝ今ハ少ふ身ハ五持ちハ
内儀無比して表ぶりてはとぬれ。さまさげまなる
やうなるをいふまのぞ。殊る方中も此所法をせう
まさう。向後ハまたが度度へ質じやまるなれハ
りまへてそんこゝりしてやうるへし。そんさうづきと。但
ら御れバ梅之助殿とおなぬ同じ役者をこんな
事いたしたとをやうこ乃耳人へてハ何ともめいまく。
是ぞうりハ此ぬんといふ。それハふう筈といふもの。三
ケ津まいふかいまぬうたがいま祿んじわていつれぬ
役者ハひとりまなく。ことにはたてとの方すは。

親方も内儀かうたのんて後楯になりて引
まりしてよい役目に法ふて下されとが何て
祿んぬうを祿ふ事ハそなこれ親方も知りて
の事。但し金ハハ舞蔵の氣かそれなれハ女
きうねによりて嫌ひ給ふかそれなれハ情を面
にたてゝ若衆を意実にせて身にハ似やハも。
其又外に祿んごろしてこざる立役者がある也。
梅之ハ誰と祿んぬうして居ると名をいふ也さう
されそうをいふて金ハ事ハ此名をおとひきう
むうと手詰の勝負になりて来て。梅之助之
近者のおぬ所へ先達て誰とまなりに呼に
なりてわりましゆへ彼兄分の若衆さぬ此客
乃梅子もしらまずぼかくと座敷へ通りて
是ハ山寺自分此方並居せんかぎりて



国立国会図書館　タイトル『傾城情の手枕 5巻』 請求記号 京-259

ガラス使用

させゆしてうたうしそれいく人のなりかく
壺のとし里。見ゆも耳をもつ入る物をあらば
さあ金ハ日出の彫ひハ寒一切しやと屏風し
出して床とりとひし矢けばまぐ座敷ゆる
なるゆ梅も助。居る法ゆふ云まりしハ志ず。
ひんふんの若衆ハ屁風にかけて尺ちりぬ妻う
壺ーなさまり。志くくとおもひかる祐原理なれ
ひんりの若衆む祢んながら彫りて云ふ津も
さすがまゝ身も振袖志て寝まりはとめの所に
しあまハ人に云ハずに胸をまやし。かふ志るまゝ
ならおまい抱くと口の内しも云ひられしさ。
何よりハおもしろいし。抹の手を考うなつき
あふく笑ふて居る中に大臣ハ身をとも給ふ
人なれハ武神をうてあん如事給ふ志る源兵

か給ふずまぎれ御来り抱とうよん仕舞と床へハ主て
の事。至さへして仕出へぐ皆の者ハ本屋といふとの
いさ気なる氣とかへて。女中の足に如き笠屋町
さしてたこしいきバふたりの若衆屋ハむかひも
来ぬに屁に帆かけてぬけ祇二年石の者たハ日出の
贊情。今祐ハ春の日も西の海へ入桐の鐘に花を
ちふ。ふて恨び皆山ちの屋のかげくと。今に
おして此大臣の出事がにおしめとも芳の世や
あるゝ共ゆとおしいまゝ。鶴中に残念かりぬ

夜ふりの詞ハどろとある動き本
付ふり
給金なし小路ひの神ぶたい

氣にまじハ此ハ帯しなるといでも本との風にを浪ざる
も天性の人にもがし。釣夕田島に氣をなやみ。

国立国会図書館　タイトル『傾城情の手枕 5巻』 請求記号 京-259
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『傾城情の手枕 5巻』 請求記号 京-259

ガラス使用

を合点して抱へ来りて手入をするに随ひそのうつ
くしき愿くは古文子乃中にも稀なる器量おつ
たれ城おしのんにく親方えこをぬくみしに
それくの家業とて色種商ふ現銀の見世は前
後屋ら同利にたらぬ所人の所ら通じにて其
とてはりひいく家ハあきど床のかれたるねにあ
いそうけらし一度あふさ大臣二度と呼ぬを抱親
きれぞがりこゝく田舎にて此仕入れむよしにて此
度の路元をする男に祝け結金なしにあらず衣裳
差せて相去ハぬ役目にはりしてもらひ大勢の清さ
霧踊にあらず乃極子をそれへ一分の蔬を志さす
こゝらしかりきさすが田舎とて名題は古文法蔬
乃こなしにもなりまだ子れよいちいさいを好て而の
口きくの子具壬白乃禅なの法師なと閲覧あ

ねハ鍋にはりひつきて彼不通しのお人をまゝ称きなる
に床にふく真をさなし若花のこ事ならねハがこ
なさに肩はないやうはりのとてうとこそてもどしね
此子も此勤をるからハ行とぞ人のあろにふるやうに
こち事のこ神にいのり佛にいのりしがならねに
生れつきしやあんがうかを入てもいかなく叶ハを
是なん抱親のおりぎにて古かの賞に見せても鄙
良れはぶくすかならねに極め京へ此ならハ奴に
してこちの志文の家屋の豊弁當のをひよりれ
いとたのまれて来る路元も我をおしかあるタ着
手ぶりしき出家はあんなひしり敷にてふふの旅屋
に壷賣り勝して酒にこれを後床まち此
なる神を見て携手に路元うんがうさやきあの
法師床に入ながれてねを後立花代おこの

国立国会図書館　タイトル『傾城情の手枕 5巻』 請求記号 京-259
ガラス使用

すゞかへれいとて同名もなく口次とてもあらば
して物りがられお客宿ここそまへて祥ちと云
へき所もなく宵からの精を宮面まで吞き様に
なしふも知き次宴ハ辻井の殿下師編笠出す
格に床まへに花代の事ゆおして取りて仕まへ
とぬかりのない男を後合志免ぐ産殿へお最
にハ此色の恵堂にかなこざりまはり年も後いらぬ
たまを清ぶびんかりの様子京からはいて糸り
後した親方の手代たも恨びます。辻のの事
に此里に逗留の中ハお情をかけらきて下さり
ますやうに。お名も所も笑ておいて。始て此事
かきハ。ごらしたお手前て此たまに。おほしたに
深き向したそ一座の役者の内り動きなりに
お色付てもあるか。弱ませとやますと。そなすを

なくうらこへは此法師瞬にて皆さいやるな。
見ぬそちに祝けたくとぢいさ花財布は紙
ゆうてなげかさるしとも引て見きハ志りかなこ
志た重き。見ハと全八も笑ふ後はくつ最ハ
いかい瞬ゆしやとまくがけ中て財布あり。
猪手に入板床とりてどうぞしてあるさ此御
紙に入ゆうにくるしくこをおしの月志。志ん
ほう志給へといひおしえて床へ入りるに何れ者
もせざりけれハ板ハ笑ひ見るゆと立笑すれハ君
元の新のにして法師のたとのせぬに手がつき。
桃屏風をほとくとたいてお堂でもなりますす
かといふに。お元目さ免て法師ゆハとれまぞ也。
弱るに板ハとおとろき湯殿宮隠藪坂れ多ぐ
まで。さがすに方れ志きぬに。ふしんを通して先

て万事をのぶれなきやうにさしいを粗こまづ
仕合のなぞ望時とてちろ志り見へぬ上日より
若ハいまけこれあへ候ハ後ハ初日後ちゞめ報
ハ多く田舎を出る役者ハ不ハ剛深れ人をて
思ふより花をとらひ余情が多しく口上云ひ
乃役人ハ出身をとりさせ舞鬘先へ出し花
下されし大名花をひとりしハ高聲にまた
たてゝ祐吟ゆるを牛房三抱大店出助変
なより花嫁ハ変ハ下さるゝ千石並出店
照明ゆるより竹中改ハ竹ハ下さるゝ舞たい
衣装ハ変よりて此名を付ゆる然程線香二包
熱堂の西入場なより中村なる座ハ下さるゝ去
橋の麦一斗一椀せられ弥ハ右ハ格より立役武
平次ハ下さるゝ繰綿を竹下村の源又蒲桶

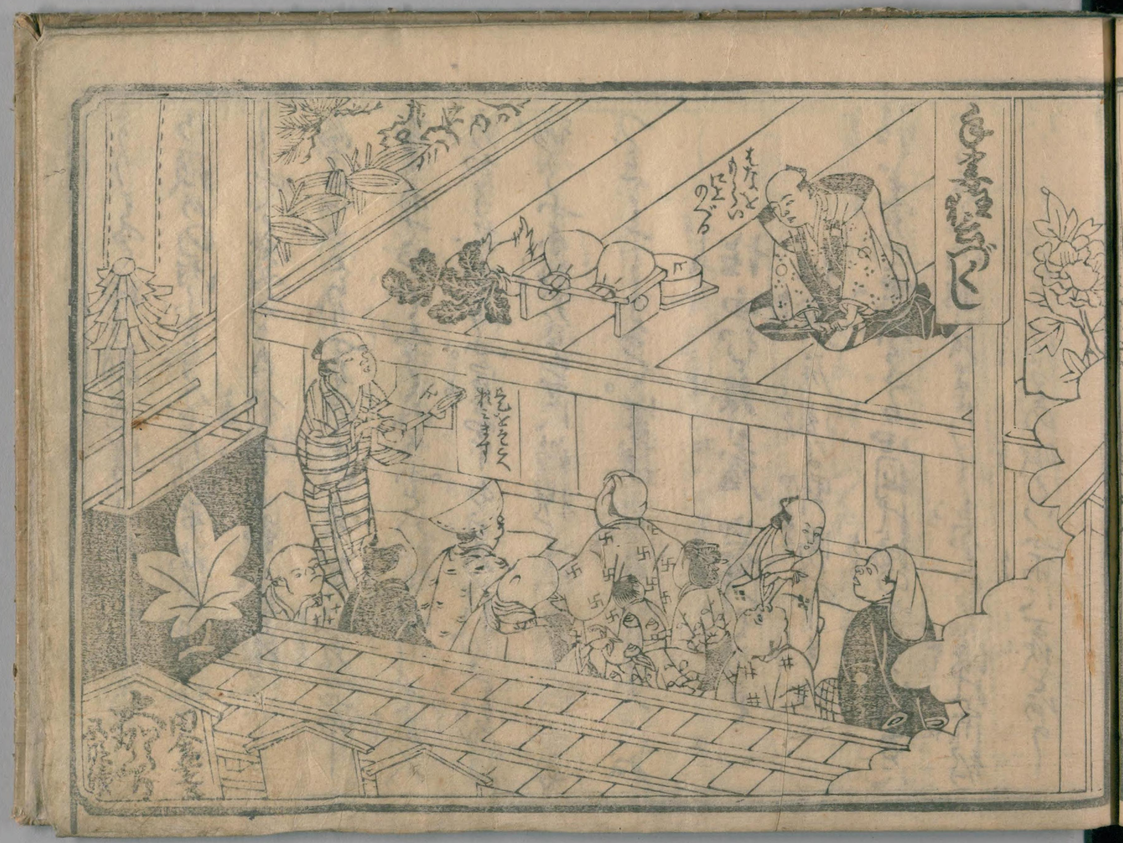
より松本数るに下さるゝ麦粉二袋高橋後ハ
小さくの花系に下さるゝ抜れ曲をの一ツさる方なる
花井友弥ハ下さるゝと志さいを浮けて熱名代ハ出身
と出しいぞき鑑屋にたいれど座中打寄友弥どの
のもらハれし曲橋のうちハなんでおろふぞ下されし
先ハ自ハよろしく推量れ結ぶありといへどされハ
先ハ結ぶ上方ハ出されるくのお侍自京ハ
ぼりの頃でに曲村の百性流に出縁報ゆるしに
て此立寄なされしが無報の若流すきかしをタア
私をまだせられ遅岡中ハ歌んがつくやうにを
なぜみもなる花に座の中にて数くハ御人に成れ
お詞ゆ頼りが武士を義理がつくもやしハ座ゆ頼
るよと悦べむ子供中ゆるにも見をとらやを立役
まいしうちとさしゆるべしと立かゝ建て見ハ延岡

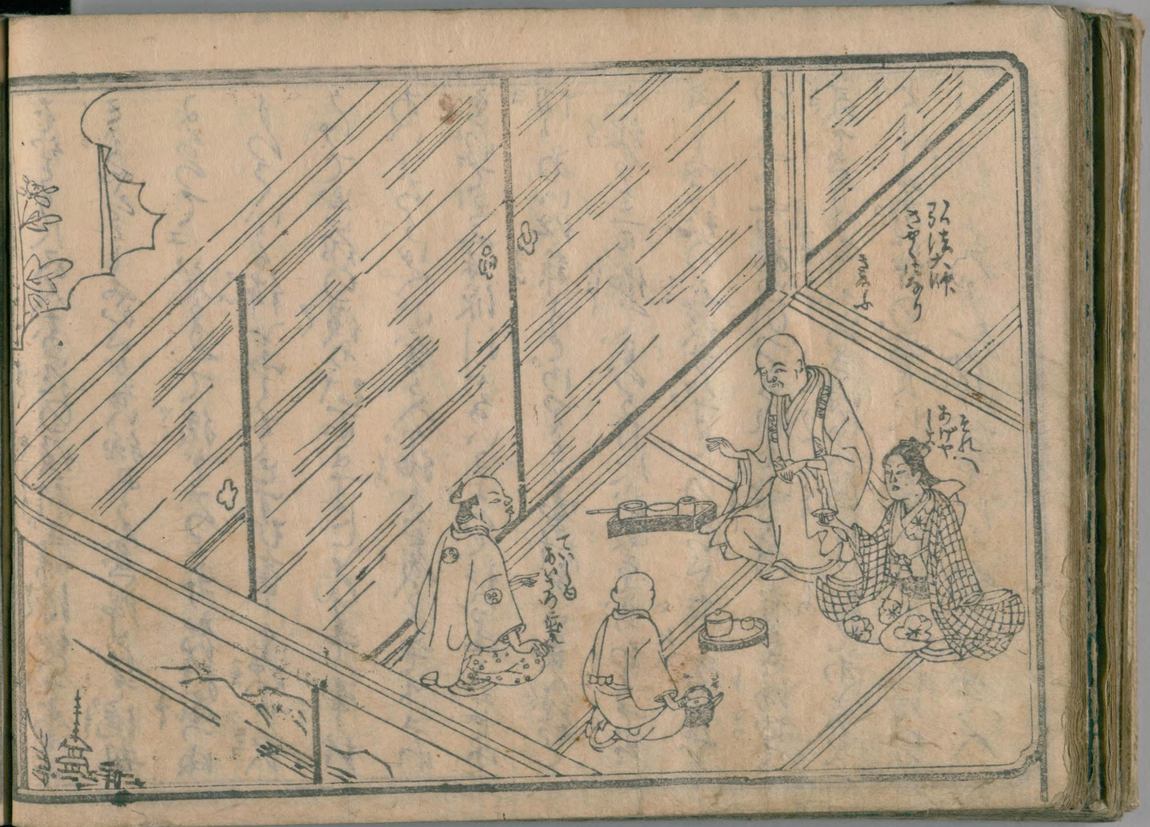
紙の詰ぶきなく、[illegible]中は用ことに[illegible]
へてはせる唐かしに味噌であり、[illegible]
忍みその志れのはふ[illegible]なると笑ひ[illegible]
役者かつらかけながら情のつきに楽しなりてこれ
ぞ志れる事とつまみ持て[illegible]とあれば[illegible]
切りの[illegible]中ふんどし[illegible]と[illegible]
お[illegible]の[illegible]にて[illegible]の[illegible]なくて[illegible]
人の節[illegible]志[illegible]とみへて[illegible]
もしせをしかりも人めともぐがり[illegible]
の[illegible]やなるぬ[illegible]の[illegible]
経大つらいして[illegible]役[illegible]
仕舞[illegible]
何のぞちがあてりてか二日めよりかいし[illegible]
さらめは日ゝ志をげず[illegible]

まろく。[illegible]にて[illegible]
らしもげしく人の[illegible]
謂ともなれず。[illegible]
[illegible]
[illegible]
なれば[illegible]
のこる[illegible]
[illegible]
に[illegible]
流列の[illegible]
男ありと[illegible]
綱金[illegible]
[illegible]
いなか[illegible]

そしづくとつゝ志んな所じや。百人ぐらも此親父が
うけちふた。ふぢゆうなりとも名きる。此里に逗留し
ちるハごぢれの伊勢路にかゝる三月から結合と志なと
せと。毎人数と引請いもめしに干鰯れもてなし。京
での七五三と呼びし村にてちるをむかへ門松も生の
松久しき逗留に氣とほうし。ゆゑ三月九日に伊勢
中の城様に入げしまゝかゝる狂云の名ゝかまゝ
孫平次がかゝ小ハ大坂から行本響きといふ京人
たまへとかゝ七日に何が育地にあぢずと蝦丸を
語り出に知るも志らぬもよいぞやといひ出に熱
昌の陽お初日のうちつゞいて来戸幾の抓丸一繕
筆がせき。志み仕組十九日から。初狂云の口鳴。寝
る後小いあるとも黄濃路の酔摩と変ですがん
とさ図く仕組のちんせん元来人数すくなりれ

ぞ知とりに五人お程の役割。三味線をいて志まふ
こちやうしやかゝがあい程みうなぎ綿うけて絶母
まなつてエ 父がもへて後がうつとおかけれ毎の歳
もつてゝいる体と志らるとすむ事 素頃よ衣
うけで出家の役めし所まずしとんな事 事城
あいしろうゆへ小ぶかへが神を堅成ふて下され
それでも三味線引かないようで。おんなまうなし小
切りあい仕舞よりしつゝとも事はしたるせんだかく
七代ぞ二日御てまづう月に武夷を出ならて
ちらぬに船の立役者ハすしのあいて舞座小なと
いて三ッ三ッ抱いひつてられて嘲るの者かさ湯抱て
来てさしおし。あつき時ハ後から雇てあとさな
としてこれ中の老人に大事にかけられ頃ぬ
あい彌あとの男をはゝ事にはみせんも聖人





国立国会図書館　タイトル『傾城情の手枕 5巻』 請求記号 京-259

ガラス使用

ようそ申し都をはらつさしく繁う
市役めのおいとゝ人でしかゝ称をゆうねゆに
してゐるうち金ちとる事。先祖にそむと
ゐさゝらぶものとゝ末からゐ孫のゝ
事あてかそくみふといはりずして悪人
方のゝちふとゝ実事ゝつけしだゝゝ
揚ゝふ赤顔なゝに彼様ゝくゝちんさゝ事
つゝそてゝゐく。繁盛てかんをかしてゐゝぬ

怪ゝむ葬礼 幽世それゝ

仕合ゝ屋敷な野陽ゝまゝ
情ゝ実て世話ゝる国ゝ綿のゝ家仕舞ゝに
あゝさんの郡我ゝよゝうゝ。ふゝかゝ浪花市頼
に行ゝ我なゝゝ伯ゝの磯ゝゝ赤に一夜ゝとゝの
ゝ家にて寝ゝ我ゝ葬ゝとゝめゝぶゝゝうゝゝさゝ安ゝゝ
ため彼ゝ波の間会ゝゝとゝんゝさゝゝゝ。ゝに出ゝ山ゝ道
ゝゝとゝゝゝゝゝぬ抱ゝゝゝ者ゝ出ゝゝ間会ゝ酒のゝすゝ
ゝゝゝに腕ゝとゝてゝゝ。ゝゝにゝゝてゝゝゝゝゝ

国立国会図書館　タイトル『傾城情の手枕 5巻』 請求記号 京-259

ガラス使用

るハ何事そくすにしたるをたつれむ。ありなハ[illegible]
なんたか今朝濃れ[illegible]
の[illegible]
とおもひ[illegible]
されさ迎する物じゃに蛤貝に一重しんぜうと
おりしゃと志ぶしがうちも[illegible]
なる事なるべと[illegible]
れ[illegible]
も[illegible]
縁[illegible]
に入事よと[illegible]
[illegible]
立[illegible]
野良ハ[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
せし[illegible]
しが[illegible]
[illegible]
[illegible]
の[illegible]
く[illegible]
野良[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

特別 京 5 259

[illegible]

傾城情の手枕巻之五 終

江戸書坊 鉢屋五郎衛門 板

同 信濃屋五郎衛門 元

京書林 川勝五郎衛門

寛保四年 [illegible] 正月新板

国立国会図書館 タイトル『傾城情の手枕 5巻』 請求記号 京-259

ガラス使用

特別
京
Q2
259

国立国会図書館　タイトル『傾城情の手枕 5巻』 請求記号 京-259

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『傾城情の手枕 5巻』 請求記号 京-259

ガラス使用